

奥州市胆沢区 石田 I・II 遺跡 — 古墳時代のムラー



5世紀後半の住居から出土した土師器

1. 調査概要

調査期間：平成23年6月14日～11月15日（予定）

調査対象面積：7060 m²

所在地：奥州市 胆沢区南都田字石田地内

事業名：経営体育成基盤整備事業南下幅北部地区

委託者：県南広域振興局農政部農村整備室

2. 基本土層

I層	暗褐色土	約10～30 cm	耕作土
II層	暗褐色土	約0～5 cm	遺構堆積土（遺物包含）
III層	灰黄褐色砂・粘土	約0～40 cm	遺構検出面
IV層	黒褐色土	約30～50 cm	水性堆積
V層	灰黄褐色砂・粘土	約0～20cm	水性堆積
VI層	礫層	層厚不明	水沢低位段丘（縄文晩期頃に離水）

3. 遺跡立地・周辺環境

石田Ⅰ・Ⅱ遺跡は、胆沢扇状地の水沢低位段丘面（約2000年前に形成）上にあり、西南西約1.2kmに角塚古墳（5世紀中頃～後半築造）があります。遺跡現況は宅地、水田が主体です。遺跡内で遺構の多く分布しているのは、宅地に近接した場所で、微高地と考えられます。遺跡内は、「石田」の地名通り石の多い場所です。また、地下水も豊富で、遺跡内のいたるところで湧水します。遺跡北側には境田堰が東西に流れ、東側には沼地があったようです。このことから、昔から石を取り除けば水田耕作には好い環境であったと考えられます。

今回の調査範囲では、古墳時代～平安時代の集落が確認されました。調査区北側で5世紀後半～6世紀、調査区中央で7世紀後半～8世紀、調査区南西側で9世紀の竪穴住居が見つかっています。ほぼ同じ時期に石田Ⅰ・Ⅱ遺跡の北北西の胆沢川南岸に位置する中半入遺跡においても集落が営まれています。



石田Ⅰ・Ⅱ遺跡位置図

4. 検出遺構 (10月5日現在)

古墳～平安	竪穴住居	33棟	竪穴住居状遺構	4棟
	土坑	7基		
時期不明	柱穴列	2条	柱穴状土坑	130個
	溝	10条		

見つかった竪穴住居の主体は、5世紀後半、7世紀後半～8世紀、9世紀の3時期で、現在までに5世紀4棟、7世紀後半～8世紀の建物15棟、9世紀3棟について調査を終えています。この成果の一部を御紹介します。なお、9世紀の竪穴住居は水田耕作による削平により遺存状態がよくありませんでした。

(1) 5世紀の住居

遺跡範囲北側の河川跡周辺に集中しています。個々の住居は、調査区幅が狭いために全体形状を把握できませんでした。5世紀後半は、すでにカマドを使って煮炊きを行っている時期ですが、今回の調査範囲からは、煮炊き場を確かめられませんでした。住居は一辺3.5～5m程度の規模と考えられます。なお、5世紀の住居からは土器、黒曜石製石器、コハク塊、鍛冶関連遺物が出土しています。

本遺跡の北西約2kmに位置する中半入遺跡でも同様の遺構・遺物が確認されているほか、濠で囲まれた方形区画遺構(首長居館か?)の存在が明らかとなっています。今後の調査で類似の遺構が本遺跡にも存在するのか慎重に調査する必要があります。



5世紀後半の竪穴住居



土師器坏が重なって出土した状態

(2) 7世紀後半～8世紀の遺構

住居は5世紀代に比べて大型です。石田I・II遺跡では一辺7～8m程度が主体となります。傾向として住居北西壁中央部にカマドを持つこと、カマド周辺に土器が置かれ、脇に貯蔵穴が見つかることもあります。G区では住居入口と考えられる張出部を持つ住居もみつけられました。また、C区では火災にあった住居も見つかり大量の遺物が出土しています。

今回の特徴的なのは、住居に併設される竪穴住居状遺構の存在です。F区では住居の北側に鍛冶関連遺物が出土した竪穴住居状遺構



火災にあった竪穴住居

がみつかりました。これについては、遺構堆積土の底面付近から7世紀後半の遺物、堆積土上部から9世紀の遺物が出土していますので、今後の遺物洗浄作業後にすべての遺構内出土遺物の年代を再度検討する必要がありますが、G区でも7世紀後半の同様の遺構が見つっています。これらの竪穴住居状遺構は、工房的性格をもつ遺構か、あるいは工房や住居などで出たゴミを廃棄する穴と考えられます。したがって、7世紀後半～8世紀の竪穴遺構のなかには、竪穴住居+工房のセット関係を有する遺構があったのではないのでしょうか。調査を継続していけば、竪穴内にカマドとは異なる鍛冶炉のような火所が見つかるかもしれません。



1辺8.3mの張出部を持つ竪穴住居



一辺7.5mの竪穴住居



製鉄関連遺物が出土した遺構



土製支脚を伴うカマド



7世紀後半の住居カマド (F3号住居)



住居内から出土した石包丁 (F2号住居)

5. 出土遺物（※出土遺物の一部を現場テントに展示しております。是非ご覧ください）

古墳～平安 土師器・須恵器、宮城県湯ノ倉産黒曜石製搔器、磨石、石包丁、磨製石斧

鉄滓、鞆羽口、鉄鉗、炉壁片、土玉、土製紡錘車、コハク塊

近世 古銭（寛永通宝）、銅鏡、煙管

（1）皮革加工関連遺物

黒曜石製搔器・・・使用痕分析によって、生皮加工時に特徴的にみられる光沢が見つかることが多く、主に皮と肉を分離する作業で使われていたと考えられる。

磨石・・・・・・・・・・いくつかの種類があるが、皮を伸ばす時の重石や完成品のメンテナンスなどに使われたと考えられる。

（2）製鉄関連遺物

鉄鉗・・・・・・・・・・挟んで掴むための道具で、熱した鉄製品などを掴んで水に入れたりするとき使用する。

鞆羽口・・・・・・・・・・炉に風を送り込む送風管。

鉄滓・・・・・・・・・・製鉄作業で生じた鉄分を含むカスの塊。

炉壁・・・・・・・・・・粘土で作られた炉の破片。

（3）特徴的な遺物

磨製石斧・・・・・・・・・・形状から縄文時代の遺物ですが、7世紀後半の住居床面から出土しています。

石包丁・・・・・・・・・・弥生時代の代表的な穂摘具です。7世紀後半の住居から出土しています。

奥州市内では、胆沢城、杉の堂遺跡、清水下遺跡などで出土しています。

6. 調査成果

本遺跡は、古墳時代～平安時代の集落遺跡であることが判明しました。5世紀後半、7世紀後半～8世紀、9世紀の竪穴住居が調査主体でした。石田Ⅰ・Ⅱ遺跡の北西にある中半入遺跡古代集落の主体時期と同じです。

石田Ⅰ・Ⅱの西南西約1.2kmに位置する角塚古墳は、5世紀第3四半期に築造されたと考えられています。今回の調査によって、石田Ⅰ・Ⅱ遺跡に角塚古墳の築造・維持・管理に関わった可能性のある人々の存在が明らかとなりました。前方後円墳のような大きな古墳を築造・維持・管理するには、複数のムラの共同作業が想定されますので、5世紀代の集落遺跡の胆沢区中半入遺跡、水沢区面塚遺跡とともに、石田Ⅰ・Ⅱ遺跡は角塚古墳を支えた複数のムラのうちの一つであったと考えられます。そしてこれらの集落のうち、最も角塚古墳に近い石田Ⅰ・Ⅱ遺跡の人々が墓守の役割を担っていたかもしれません。

7世紀後半～8世紀の集落は、遺跡内全域に広がっていることが判明しました。今回の発掘調査で当該期の住居は20棟近く調査することになります。岩手県内でも有数の7世紀後半～8世紀の集落です。東北地方南部以南では、大化の改新（645年）以後に集落数が増加しています。今後は胆沢扇状地における当該期の集落形成も、時代の大きな流れの中で検討していきたいと思っております。遺構としてはF・G区で大型住居と工房の可能性のある竪穴が近接して見つかっています。また、住居入口と考えられる張出部を持つ住居も見つかりました。遺物は、大量の土師器をはじめとして、製鉄関連遺物、皮革加工関連遺物も見つかっております。

まだ、調査途中です。新たな成果にどうぞご期待ください。最後になりましたが、遺跡発掘調査によって御迷惑をおかけするとともに、御理解をいただいております周辺住民の方々、発掘調査作業員の皆様、県南広域振興局農政部農村整備室に感謝申し上げます。